



Title	有限性の解釈学：前期ハイデガーの哲学と気分の問題
Author(s)	佐々木, 正寿
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3169057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	佐々木 正 寿
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 5 0 9 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成12年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科哲学哲学史専攻
学 位 論 文 名	有限性の解釈学 ー前期ハイデガーの哲学と気分の問題ー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 溝口 宏平 (副査) 教 授 里見 軍之 助教授 望月 太郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の主題は、今世紀のドイツ哲学を代表する哲学者のひとりであるマルティン・ハイデガーの初期から前期までの思想展開を、特に彼によって新たになされた「気分」現象の哲学のおよび存在論的位置付けと分析という観点から照射し、それによってハイデガーの前期思想に果たす「気分」論の卓抜な意義を明らかにするとともに、その分析に基づいて彼の前期思想全体を「有限性の解釈学」として特色づけようとする点にある。

本論文の構成は、序章から終章までの5章立てに序言を加えたものから成り立っており、A4版147頁、400字詰原稿用紙換算約450枚より成るものである。

まず序章では、初期から後期にまでいたるハイデガーの思想に一貫して看取されうる「気分」現象への言及が示され、それによって「気分」現象が、ハイデガーの思想全体に対して有している特有の意義、すなわち、「気分」が哲学の生起それ自体の本質的契機となっており、その意味で「気分」は哲学の源泉であるとともに哲学の遂行それ自体の契機ともなっていることが予描される。

第1章では、近年陸續と公刊されるに至った、初期フライブルク時代の「事実性の解釈学」をめぐる一連の講義録を詳細に吟味することを通して、すでにこの時期にハイデガーが、人間的現存在（生）と世界との第一次的な出会いを「気分」に求めていること、またそのために伝統的な理性や意識ではなく、「気分」という直接的経験の場に哲学的経験の根源を求めるといった新しい観点の導入がなされたことが、文献的に証示される。

第2章では、ハイデガー前期思想を代表する『存在と時間』における気分論（情態論）の特性が、未公開のマールブルク時代のアリストテレス講義にみられるアリストテレスのパトス解釈との比較を通して示されるとともに、ハイデガーの情態論の基盤が彼のアリストテレス解釈にあることが示される。また本章ではさらに、M. シェーラーやO. F. ボルノウの気分論との比較研究もなされており、現象学的、解釈学的領野におけるハイデガー前期気分論の存在論優位の特異性が浮き彫りにされている。

第3章は、「退屈」の分析を主題とする1929/30年冬学期の公刊された膨大な講義録をとりあげ、「不安」とならんで時代の根本気分とされる「退屈」の現象学的分析を批判的に検討することを主題としている。その結果ハイデガー前期末においては、形而上学の基礎付けへの志向転換が起こっているとともに、時代性を反映する根本気分の喚起が哲学を遂行する根本的動機付けの役割を担うことが、ハイデガー前期の気分論の根本的意義として明らかにされる。なお、本章では、ハイデガー中期、後期思想に見られる気分論についても概観的に触れられており、今後の気分論の

展開の方向付けが示されている。

終章は、これまでの分析と批判に基づいて、「気分」の開示する事実性を人間的現存在の存在の有限性として捉えなおし、ハイデガーの気分論全体を有限性の解釈学として明らかにしている。また他方で、直接的経験である「気分」を哲学の基盤とすることのもつ危険性が、哲学に必須の概念化との間に生じる乖離の問題として提示され、それはハイデガー的哲学のもつ危険性であるとともに、その解決が現代哲学の根本課題のひとつであることが結論付けられることになる。

論文審査の結果の要旨

近年、膨大な量のハイデガー初期および前期の講義録が公刊されることによって、従来隠されていたハイデガー哲学形成過程が徐々に明らかになってきているが、本論文はこうした研究方向の先端をいくものである。申請者は、従来の公刊本はもとより、解読に困難を覚える初期講義録群、未刊の講義草稿、さらに話題は集めたものの未だほとんど議論のテーマとされていない大部の退屈論等を資料として詳細に吟味検討しており、それによってハイデガー前期思想の核をなす気分論のほぼ全貌を明らかにしたことは、高く評価されてよい。また一定の批判的スタンスもとられており、今後の課題提示も的確であり、全体の記述も簡潔で筋の通った好論文となっている。

しかし問題点も残されており、とりわけ「気分」の時代性、歴史性の可能根拠および主張根拠がハイデガーのみならず、申請者自身においても明確ではなく、それらの存在論的基礎付けが、気分論自体の有する問題として残されている。また、申請者自身が問題として提起した「気分」と概念化作用との関係の問題は、ハイデガー思想における「語り」さらには「言葉」の問題と密接につながるものであり、哲学の根本問題でもある。また、気分論自体については、申請者自身かなり広い視野から捉えているといってよいが、哲学の歴史においては、さらに広範囲におよぶ問題として視野に入れることが必要であり、それは今後の課題とされよう。

以上のような評価および問題点を考慮した結果、本審査委員会は、本論文が博士（文学）学位に相応しいものと認定する。